伊東市史だより

第３号

平成14年３月20日

姥子洞窟内の古墳時代の地層とアワビの出土状況。
遠方に神崎(川奈崎)が見える。

川奈・姥子洞窟の発掘調査状況

考古史料部会の活動

川奈地区　姥子窟（ウバコクツ）の発掘調査

副編集委員長　坂誥秀一

考古部会の目標

市史編さん事業・考古部会の活動は、伊東市教育委員会による埋蔵文化財の発掘調査の成果を基底に据えながら出発しましたが、それ以前の『伊東市史』（昭和三十三年刊）の業績をも踏まえていることは言うまでもありません。

当面の課題は、市の埋蔵文化財包蔵地の所在地確認と調査すべき伝世品の探索です。埋蔵文化財―遺物・遺構・遺跡は、地中に埋没している先人が残した生活の営みを示す考古学的資料です。伝世品とは、一度も地中に埋没することなく現在に伝えられているモノで、考古学の研究対象資料です。埋蔵文化財は、遺跡の発掘調査によって歴史の史料として活用されますし、伝世品も学問的な調査の結果を経て歴史史料としてクローズ・アップされます。地中（水中）の資料を地下あるいは埋没資料、伝世の資料を地上資料とも称します。

それらは物質的資料ですから、ともに考古学の対象となります。

考古学は、物質的資料によって過去の人達の歴史を明らかにする科学です。過去とは、人類の発生から昨日までを指しますから、石器時代から現代までが研究の対象となります。物質的資料はそのままでは歴史を語ってくれません。対象資料の年代などが明らかとなったとき、それは歴史の史料として位置づけられることになります。

考古部会は、市内に残されている物質的資料を調査し研究して、伊東市の歴史を明らかにしたいと考えています。

このような考え方によって市内の調査を実施しています。その調査を進めていく過程で問題点の一つとなったのが、海食洞穴（かいしょくどうけつ）―潮流・波の作用によって形成された洞穴―の存在でした。市内の海岸には多くの洞穴がみられますが、先人達は洞穴を利用していたのだろうか、という課題です。すでに、三浦半島（神奈川県）や房総半島（千葉県）では海食洞穴の考古学的調査によって、生活の場（俗空間）のほか埋葬・祭祀の場（聖空間）として利用されていたことが明らかにされてきました。いままで伊豆半島では、このような視点から洞穴の調査を実施することがほとんど行われていませんでした。そこで、市史の編さん事業として、市内に存在する海食洞穴の調査を試みることは、伊東市のみでなく伊豆半島における洞穴の歴史的背景を考えるうえでもきわめて重要と考えるにいたりました。

川奈・姥子窟の遠景

川奈・姥子窟の発掘調査

川奈地区の姥子窟（うばこくつ）は、鎌倉時代の宗教者・日蓮聖人が伊豆に流されたときに、この洞穴で一時を過された、という伝説をもつ場所です。また、太平洋戦争の時には、本土防衛のために「暁部隊」（あかつきぶたい）の特攻用船艇の艇庫として利用された、と伝えられています。

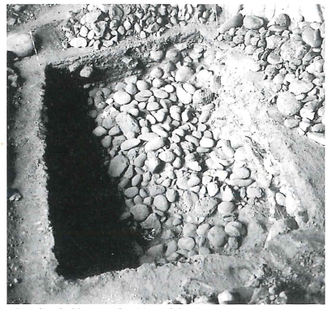
現在、洞穴は、約幅三十メートル、奥行き二十メートル、高さ七メートルの大きさをもっていますが、本来の幅はもっと狭まっていたようです。このことは、発掘に先立って、洞穴内に祭られている姥子神社を管理している川奈・三嶋神社の稲葉一宮司を訪ねた時にお教えを頂きました。稲葉宮司のお話しによれば、特攻用船艇の艇庫として利用する際に陸軍によって姥子窟の拡大が計られ、その結果、後に上方部が崩落して現状のようになった、とのことでした。かつての姥子窟は、奥まで光が届かず暗かった、とのお話しでした。

調査は、平成十三年十二月三日から二十六日まで、祠の前方の参道の部分に二本の溝（トレンチ）を発掘して実施しました。深いところでは三メートルにも達しました。

発掘の結果、姥子窟が利用された「時」についてほぼ明らかにすることができました。その上限は、縄文時代にまで遡ることが推定され、ついで、古墳時代の前期になって利用されたことを知ることができました。さらに、近世そして近現代にも利用されていたことを示す遺物が出土しました。

縄文時代の土器は発掘されませんでしたが、当時の人がもちこんだと考えられる黒曜石の破片が出土しました。黒曜石は、縄文時代の人達が利器（鏃など）の材料として利用していたものですから、その出土によって縄文人がこの洞穴を利用していたことが推定されます。この度の発掘では、洞穴上部（天井の部分）の崩落による落盤層にあたり、その下方に掘り進めることができませんでしたので、縄文時代の土器などの存在を確認するにいたりませんでした。

落盤の上部には、大形の礫（幼児の頭部大）の層が存在し、その中から、古墳時代の前期の土師器が出土しました。土師器の形は、高杯などで、日常的に使用する食器類というよりも、祭祀などに主として用いられる形状のものでした。出土した高杯は、ほぼ全体が復原されるもので、後世に外部からもたらされたという状態ではありませんでした。さらに、高杯の出土した層から大きなアワビが三十数個、大きなマツバガイ、サザエが発掘されました。大きなアワビ、それはいずれも殻の大きさが十五センチを超えるもので、加えて、外面には火熱された痕が明らかに認められました。これらの貝の存在は、古墳時代前期の人びと―それは五世紀の前半ですが―が、何んらかの目的で、洞穴内で用いたことが明らかです。アワビと高杯、このセットから考えられることは「祭り」の情景です。


古墳時代の礫群に挟まるように
アワビと土器が出土した

古墳時代前期の集落遺跡の存在は、川奈の地域でも知られていますので、台地上に集落を構えていた人びとは、海を生業の場としていたことでしょう。自然的条件にめぐまれた天然の良港・川奈の地を舞台として生活を営んでいた頃の人の「心」の一端を示す場―聖なる空間―として姥子窟が利用されていたことは疑いありません。

高杯に秘められた人びとの祈りの心は、神饌（しんせん、神に供える飲食）を供えるときに用いられる形状の土器にあらわれています。そして、アワビは、まさに「生饌（せいせん）」―生のもの―であり、火熱された痕跡は、そこで「熟饌（じゅくせん）」―調理―が行われたことを示しているのでしょう。海の神に対する神饌儀礼の場として姥子窟が利用されていたことを示している、といえるのではないでしょうか。

上層の部分からは、近世（江戸時代）の陶器の破片や、太平洋戦争の時代の遺物が出土しました。江戸時代の陶器の破片は、近世に入って姥子窟が一時的に利用されていたことを示しています。太平洋戦争の時代のモノは「暁部隊」が艇庫としていたという事実を裏付ける資料です。

発掘調査の結果と課題

発掘調査の結果、得られた資料をもとにして姥子窟の歴史的背景について展望してみますと、利用された時代は、近現代→近世→古墳時代（前期）→縄文時代（推定）となりますので、中世の日蓮伝説の時代についてのモノは出土しなかったことになります。

その伝説について考えてみますと、モノがナイこと自体、伝説の内容を示している、とも言えましょう。日蓮聖人の伊豆流罪は、弘長元年（一二六一）五月十二日のことで、『一谷入道御書』に「伊豆国伊東郷というところに流罪せられたり」、そして「同三年二月に召し返されぬ」と記され、さらにその地は「兵衛介頼朝のながされてありし処」と述べられています。伊豆の伊東郷は、現在の伊東市にあたることは確かでしょうが、そのほかは伝説として伝えられているに過ぎません。伊東の「川奈」が日蓮伝説地とする伝説は「船守弥三郎に宛てた手紙」によって生まれました。その伝説を生んだ手紙に記されています「川奈」と「津」は、近世における川奈の実情にそくして表現されたものと思われます。津とは港のことですから川奈港の「村はずれの姥子窟」に着目されたのでしょう。いずれにしても、伝説と史実の狭間を埋めることは容易ではありません。

伝説を秘めた御船岩

近世の陶器の出土は、ことによると船待ちの際、一時的に洞穴を利用した人たちによって残されたもの、とも考えられますが、それは定かではありません。そのモノが俗空間の産物か、聖なる空間を示すのものであったのか、いまは

知る由もありません。

近現代の遺物は、暁部隊駐屯を示す物証と言えるでしょう。

発掘の報告と展望

川奈・姥子窟の発掘調査は、市史編さんの事業として初の試みでした。発掘の期間と発掘面積はきわめて限られたものでしたが、沢山の人たちのご協力を得て成果をあげることができました。この度の発掘調査の報告は『伊東市史研究』第二号（平成十四・三）に掲載されていますので、関心がある皆さんは是非ともご覧になってください。

考古部会の活動は、発掘調査という仕事と地上に存在する多くの物質的資料の調査と研究が二本柱となっています。そのいずれもが市民の皆さんのご協力とご教示によって進展することは明らかです。物質的資料を史料化して、伊東市の過去の解明の一翼を荷ないたい、という私達の思いに対し、今後ともよろしくお願いいたします。

最後になりましたが、姥子窟の発掘調査に際しまして万般のご協力を頂きました三嶋神社の稲葉一宮司、そして川奈地区の多くの皆さんに厚くお礼を申し上げたいと思います。

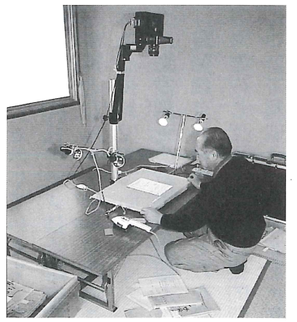
地域史料部会の活動

編集委員　加藤清志

伊東市にある歴史資料をできるだけ地元で処理しよう、というのが地域史料部会の第一の活動です。一番多いのは、近世部会や近現代部会の資料整理の手伝いです。

近世文書の悉皆（しっかい）調査（すべて調査）をしていますが、文書はすべてマイクロフィルムに撮影して、現物の文書は所蔵者にお返ししています。以前は専門業者に委託撮影していましたが、現在はマイクロフィルム用のカメラを備えて、市史編さん室で撮影しています。

明治以後の文書（近代文書）は、全部を撮影することは不可能ですが、重要と思われるものは、マイクロフィルムに撮影して手元に置く必要があります。市役所や、漁協、各区などに保管されている文書だけでも、ぼうだいな量で、その中から必要な文書を見つけ出すためには、まずそのリストを作る必要があります。今年一番力を入れて来たのは、市役所に保存されて来た議会関係文書のリスト作りです。狩野川台風で多くの貴重な市役所文書を失ってしまったのですが、幸いに議会関係文書は残りました。明治以来の豊富な資料を含んでいるので、項目ごとにパソコンに入力しています。明治の文書は、江戸時代よりも読みにくい文字が多くて苦労しています。地域に残る文書以外のさまざまな資料の調査研究も、地域史料部会の大きな仕事ですが、それぞれの専門家の力を借りなければならない分野が多く、予算の制約もあって、なかなか手を広げられませんが、石造文化財の調査と建造物の調査は進行中なので、項を改めて報告します。



近代文書の記録作業

石造文化財の調査

専門委員　松原典明

これまでに市内の石造物の調査は、郷土史研究の一環として道祖神（どうそじん）の研究などが行われてきました。そうした成果をもとにして、市史編さん事業では、これまであまり手がけられなかった石造物にも目を向けて調査を進めたいと考えています。

伊東市は、石造文化財の宝庫です。道祖神の他にも、神社の鳥居や石段、石橋、石灯篭、様々な供養碑や記念碑、或いは、墓石などたくさんの種類があります。これほど多くの石造の文化財をもつ地域はあまりないのではないかと思います。

江戸時代の初期に伊東周辺の石材が江戸城の膨大な石垣の石材を賄った事実は、あまりに有名ですが、そうした優秀な石材の産地であればこそ、このような多種多様な石造文化の花が開いたと言えるものと思います。

実際の調査は、石造物の形やそこに刻まれた銘文などを一点づつカードに採録してゆく方法で作業

を進めています。地元の森山直介・竹内禮治・三枝進の各氏にお願いしていますが、たいへん地道で根気のいる仕事です。これまでに七百枚あまりのカードに収録できました。

中世では、伊東家の墓と伝承される最誓寺境内の中世石造塔群や宇佐美城山山麓の宇佐美家の石塔群の調査を行いました。近世では、佛現寺下の和田村他五ケ村共同墓地の墓碑調査などを進めています。

墓石の調査では、多くの歴史が明らかになりますが、元禄の大津波にのみこまれて亡くなった二人の少女の墓に出会った時には、災害の悲惨を思い知らされました。

また、和田村の共同墓地には、ここで代々名主を勤めた下田家の墓のなかに江戸初期の年号をもつ墓碑が残っていることが確かめられました。このことは、江戸後期に伊東のことを書いた『伊東誌』という本の記事にも出てきます。これを書いた浜野建雄という人物の時代から百五十年の時を経ましたが、彼の見たものと全く同じ墓碑の前に立って、同じように伊東の歴史を考えることができるという嬉しい体験ができました。

石造文化財の調査状況

石造物には、先人が残した多くのメッセージが託されています。立派な碑文に限らず、何気ない墓石や石段にも、多くの歴史が刻まれています。こうした石造文化財が、地震や墓地整理などのたびに次々と姿を消しているのが現実です。根気のいる調査作業ですが、ひとつでも多くの石碑の姿を後世に伝える役割を果たしていきたいと考えています。

建造物の調査

専門委員　建部恭宣

市内の全域にわたって、神社や寺院を主とした歴史的建造物の調査を行なっています。現在のところ、神社二十五件、寺院六件、住宅三件の調査を終えました。建物の特徴を調べるのは無論のことですが、併せて、棟札や墨書（ぼくしょ）・普請（ふしん）文書の有無などについても調査をしています。

棟札（むなふだ）とは、建物の棟上げに際して書かれる板札のことです。そこには、建物が何時建ったのか、大工を初め、どのような職人達が工事に携わったのか、さらには、その時々の神主や住職および関係者など、実に様々な情報が記されています。したがって、紙に書かれたいわゆる古文書にもひけをとらない史料として注目されます。調査の結果、これまでに、約五百枚を越える棟札が発見されていますが、これからも調査は続きますので、最終的に何枚の棟札が発見されるか、楽しみです。

調査した棟札のなかで最も古い年紀を有するものは、日蓮宗の朝善寺（宇佐美）旧本堂の棟札です。この本堂は五年前に建て替えられてしまいましたが、棟札に「天正十年壬午二月吉日」とあったので、旧本堂は西暦一五八二年に建てられたことが判明します。またなかには、引手力男（ひきたじからお）神社（十足）のように、火事に遭遇しているので二、三枚しかないだろうと伝えられていましたが、社殿内を調査したところ、火事で焼け残ったものを大切に保管していたことが判り、合計二六枚もの棟札が発見されたという、調査者にとっては嬉しい誤算を経験し、氏子達の熱心な信仰心に触れることもできました。

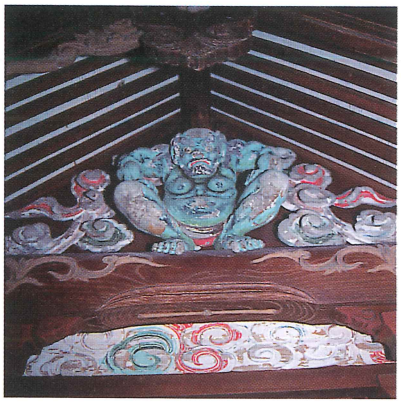
一方、建物の一部に当時の職人達が書いた覚えやいたずら書きなどの墨書が発見されたり、詳しい建立の経緯や費用について記されている普請文書が出ることもあります。これらの史料を総合して、建物の建立年代判定に役立てます。

棟札などの内容から地元大工の仕事振りを知ることができますが、他の地方から伊東まで仕事に出かけて来た職人のいたことも判明します。三嶋大社（三島市）の現社殿は、壮大でかつ彫刻豊富な例として、国の重要文化財に指定されていますが、これらの彫刻を担当したのは伊豆半島を中心にして広い範囲で活躍していた松崎の大工石

田半兵衛一族です。彼ら一族やその協力者達が、ここ伊東でも仕事をしており、八幡宮来宮神社（八幡野）や行蓮寺本堂（留田）の彫刻などにその優れた技術が見られます。三島神社（富戸）本殿は、やはり西伊豆田子の大工土屋佐七一族による仕事ですが、彼らも江戸時代中期頃から広い範囲で作品を残しています。この三島神社では、大工のみならず、遠く信州伊那の石工が渡り職人として、造営に参加していました。

池・山神社の本殿建築

伊東市における歴史的な建物の特徴としては、高い技術を駆使してしっかりと造られていることは当然のこととして、加えて、彫刻や彩色の施された見事な細部装飾に満ちた作品が多く残されている、ということでしょう。例えば、池の山神社では社殿全体に鮮やかな彩色が施されており、彫刻も豊富で神格を高めるために効果的な仕上げになっています。一方、比波預天神社（宇佐美）では彩色は施されていませんが、やはり緻密な細部彫刻に満ち溢れており、いかにも彫物大工の腕の見せ所の作品であったことが感じられます。



池・山神社の青鬼の彫刻

八幡宮来宮神社（八幡野）と三島神社（富戸）の本殿は、全国的にも珍しい「二間社流れ造り」という社殿形式です。二柱の御祭神を一間の社殿に合祀するのではなく、間口を二間にしてそれぞれの柱間に一柱づつ祭神を祀るため、二間社の形態を採っています。このように、類例の少ない貴重な遺構ということで、八幡宮来宮神社は県の、また三島神社は市の文化財に指定されています。

これからも建造物の調査は続きますが、所有者を初め市民の皆様方のご協力をお願い致します。

市史編さん室から

毎年好評の市史講演会を実施

平成十三年九月十五日ひぐらし会館ホールにて、恒例となった市史講演会を開催しました。講師は、信州大学教授で伊東市史編集委員でもある笹本正治先生にお願いしました。

笹本先生は、「武田信玄」研究の第一人者ですが、近年、先生自身が切り拓いた分野でもある災害史についても詳しいことから、伊東市史では津波・洪水・地震・噴火といった災害の歴史を取りまとめていただきます。

講演では、先生の幅広い研究活動から生まれた知見をもとに「歴史を地域の再生にどう生かすか」というテーマで先生の熱い思いが語られました。

好評配布中　刊行図書三冊

『伊東における狩野川台風の記録』『伊東の今・昔』

伊東市史叢書第二集『伊東における狩野川台風の記録』と伊東市史研究創刊号『伊東の今・昔』が出版されました（写真）。

市史編さんによる刊行物

辛い思い出の狩野川台風の詳細記録や市民の体験記、編集委員長の網野善彦先生の講演録などが収録された両書は、たいへん好評で、市内の書店や教育委員会の窓口で実費配布しています。

編集発行　伊東市教育委員会
生涯学習課　市史編さん係
〒414-8555 伊東市大原二丁目一番一号
☎〇五五七―三六―〇一一一 内線二八四五